重度心身障害児者への人間学的接近（第6報）

――「ことば」ある子と――

村　上　英　治

ゆりから見れば，この世もあの世も闇にちがいなか。ゆりには往って定まる所がなか……とうちゃん，どこに在るとか？　ゆりが魂は。

ありゃ何の涙じゃろか，ゆりが涙は。心はなぁんも思いよらんちゅうが，なんの涙じゃろか，ゆりがこぼす涙は。

――「苦海浄土」より――

I

3年前，「“私の内なる障害児”への志向」と副題して，重度精神薄弱児への人間学的接近（第2報）を報告した。愛知県心身障害者コロニー，はるひ台学園重度棟での私どもの仲間の実践記録をもとに，人間学的接近のあるべきすがたを模索する歩みのひとつとして，障害児を“私自身の内なるもの”と内在化せしめていくことの中で，かかわり手としての私どもの意識の変革をそこでは問おうとしたつもりである。

その小論の冒頭に，“生まれてきてすみません”この標題のもとに，はじめてこのコロニーを見学という形で訪れた，当時の学部学生（現在大学院博士課程）後藤秀爾は，こばと学園の子たちに接し，その出会いの場におけるはげしい衝撃の中で，重い障害をにないつつも，この世の中をひたぶるに生きぬこうとする，重度，重複，重症の心身障害児者たちの，人間としての生きざまのかなしみを訴いあげようと試みた。そしてそれから3年，この年また多くの新しい仲間と共にこばと学園を訪れ，あのときと表面的には少しもかわらず，深い苦悩を秘めて生きぬくかにみえた，ここでの重い障害児者たちにふたたび接して，後藤は改めて深く心をゆり動かされるのである。

> “生まれてきてすみません”3年前，私の脳裡にこびりついて離れなかったこの言葉の源は，そもそもこのこばとの子どもたちに接した時点にある。私にとって，このこばとの子どもたちの住む世界が理解されない限り，この言葉から離れることはできない。そして今の私は，重症心身障害児の生きる世界については，ことのほか無知である。わずかばかりの知識は，彼らとどれだけ深くかかわれるかを考えてみる私の自信をなくすようなものばかりである。
>
> あの，ゆがんだ足が折れないように，どうやってオムツを替えれば良いのか，着替えの時に手足が折れたりはしないだろうか，食事の時は，どんな風に食べさせればよいのだろうか，過敏な彼らをあまり刺激はできないし……こうした問題が山積みされたその間で，どうやって1人の人間として，この子たちにかかわっていけばよいのだろうか，はたして脳障害は永久に治らないものだろうか。
>
> いろいろと余分なことまで考えているうちに，何をやったらよいか，どう動いていけばよいのか，どうやら私の中で混沌としてきてしまった様子である。

混沌とするのは後藤ばかりではない。

後藤自身はこれまで3年，3回にわたって，ここでの実習に，特にはるひ台学園を中心に積極的に参加してきた。啓示めいた出会いに始まるケイ子との両三回にわたる取り組みは，重度精神薄弱児への人間学的接近（第4報）に「三たびケイ子と」との副題のもと，そのかかわりの深まりと拡がりを展開しつつ，その深まりにおける相互性を，またその拡がりの基礎となるものを，模索し，探求する小論としてまとめられてきた。その意味ではかなり経験豊富ともいえるその後藤が，こうしてこのとき，ふたたび混沌とした思いにひたされる。はじめての，まったくはじめての仲間がひとりびとり，それこそ後藤の最初の衝撃，それを上まわるきびしい戸惑いの中で錯乱するのも無理はない。そのひとり，安藤万里子はそれらの思いを次のように述懐する。

会議室での映画はかなしかった。しかし，たとえそれが，同じ「かなしみ」という言葉で表わされていたとしても，私の感じた「かなしみ」は，親の気持とは別のものであることを，そのときなんとなく気付いていた。実習に先立ち，ここを見学する前の打ち合わせの時，「障害児に対する絶望」という言葉を私は使ったように思う。ここで言う「かなしみ」は，おそらくその絶望から生じたものであり，母親への同情であったに違いない。

（中略）

こばと学園へやってきた。病院であった。そう思った。身体の不自由な人ばかり。廊下にころがって「移動」する子どもたち。それすらかなわぬ人も多い。一生ベッドから離れられない子どもも多いのではないか……日曜学校で，肢体不自由児の「K君」や「Yちゃん」を見ていたけれど，何か違う。もっと生き生きしていたような気がする。なぜだろう？　彼らの方が障害が軽いのだろうか？　それだけか？　「コロニー」と「外界」の違いだろうか？　悲しくなって，また先のあの問をくりかえす私だった。

「この子たちは，一生，ここにいるのだろうか？」「一生，ベッドの上に……？」

施設をまわり終えた時には，「絶望」という言葉は薄れていた。なくなったのではない。もっと胸をしめつけるような「かなしみ」（最初に使ったのとは別のもの）で私の中が一杯になっていたのである。

「生命って……人が生きるって……」

自分自身「絶望」という言葉を使いながら，自分がこれまで描いていたコロニー像——みんなが，社会に出ていくために，機能回復などの訓練をうけているところ。一時的にいるところ——をなんとなく裏切られたようにも思う。コロニーは離れ小島じゃない……

そして，また，もとの絶望にもどるのである。

この子たちにとっての日々は，ほんとにはたして絶望なのだろうか。深い苦悩の中で，彼らが人間としての，より人間らしく生きていくための，生への望みはまさしく絶たれ，阻まれてしまうよりほか仕方がないのだろうか。

病院機能をもあわせた，この重症心身障害児施設こばと学園には，脳性麻痺の子たちがたくさんいる。からだの，特に下半身の動きの不自由な子たち。脳性麻痺特有の逃れることかなわぬこうした運動機能障害は言語障害をももたらす。知的な発達もそれに伴っておくれている子どもも少なくない。しかし中には知的にはそれほどの遅れを示さないままで，重度の肢体不自由を主症状とする子たちも若干いる。

その子たちには「ことば」がある。今まで私たちの出会った障害の重い子どもたちが，多く「ことば」を失っていること，ときに「ことば」をもっていたとしても，その発達が非常に低い段階でとどまったまま，十分に機能していないこと，それらがまた，この子たちの主症状でもあったのに反し，ここの「ことば」ある子たちは，ことば自体ききとりにくく，ことばづかいもまたきわめて不明確ながら，「ことば」でもって，他者に自らの意志を伝えるためのせいーぱいの努力を示そうとするのである。

「ことば」があることは，別の意味でまたかなしい。「ことば」なければ，一方的な憶測ですましてしまうようなところも，「ことば」あるが故に，私どもは，その相手方の「ことば」のもつ意味を，じっくりと考え，まに受けとめねばならない。人間が人間としてかかわりあう際の，類いまれな操作としての「ことば」によるコミュニケーションのありかたが，このとき十分また問われるべきであろう。「ことば」をもって何らかの意志を表明しょうとする，そしてその「ことば」によって具体的に状況内で動き，働きかけがすすめられる。その動き，働きかけが，相手方にじっくりと伝わり，意志の表明がさらに現実の動きとして，働きとして具現化していく。これが望ましいコミュニケーションであることはいうまでもない。ところが，そのコミュニケーションが，からだの動きが十分機能しないままに，働きがそれに伴わないままに，その段階で，その訴え手の側の訴えの水準だけにとどまって，相手方に十分疎通していかなくなってしまう。叫ぼうとする，訴えようとする，その叫び手，訴え手のこころが，からだの動きが十分機能しないが故に，働きがそれに伴わないが故に，相手方に響かず，現実的な意味をもって具現化し得ないとしたならば——これらのかなしみは——おそらくはかり知れない苦悩と不安を伴って，より一段と高まっていくほかはない。

こばと学園に入り，そしてそこでの単なる見学者的，傍観者的態度にとどまることなく，そこの子どもたちとどれだけかかわり得るものかを，自らの課題として設定しようとするもののみに，実感として伝わってくるであろう痛みとして，またかなしみとして，私たちは今年このこばと学園での，「ことば」ある障害児者たちとの取り組みを，人間学的接近のいま一つの主題として，積極的にすすめていきたいと考えてきた。

「ことば」の障害，それは単に，人間の中でのさまざまな機能の内の，ごく一部の機能の欠落として，問題にされるべき性質のものではないように，私は思う。まさしくそれは人間的なすべての動きの中で，全人格を傾倒して，鋭く生を問いかける人間実存の叫びの過程全体のつまづきとも受けとられよう。人間が人間であることをやめない限り，すべての人間らしさを，彼らなりの「ことば」に託してせいーぱい呼びかけ，訴えていこうとする重い意味がそこにはこめられている。したがってそれ

を無視すること，歪めてうけとめることは，人間存在そのものの否定にも曲解にもつながることになる。

「ことば」，この不可思議なるもの，人間存在を，この媒介によってのみはじめて確めあうことができる，人間のみが有する，この微妙なもの。この「ことば」によってのみ，私どもはある意味で，人間が人間として生きることの深い意味を実感しあうことができるものとするならば，そうした「ことば」のもつ人間学的な意味は，改めてまたここでいうまでもなく大きい。

重度精神薄弱児にこれまで数多く接してきた。そしてそれらの多くはいわゆる「ことば」をもち得なかった。ある意味において，私にとってそれは救いでさえあったといえる。「ことば」を通して伝えあうときの，あのかなしみを知ることなく過すこともできたであろうから。しかし今年，こここのこばと学園で，「ことば」ある子と，しかもその「ことば」自体，正常なコミュニケーションという視点からはきわめて不十分で，身体機能，特に下半身の運動機能の麻痺の顕著な，そして一層かなしいことには，知的な発達の遅れが，それに伴なって重度だとはいい難い，人一倍鋭敏な感受性と，かなりの知性を秘めた子たちと，こうして接してみて，私どもは改めてのように，人間実存の重味におののかされざるを得ないのである。

彼らが彼らなりの「ことば」あるが故に，それだけに深く内在するところの人間実存のギリギリと，こうしていやでも対決させられざるを得ない，きびしい苦悩を，私は，私とともに，今年はじめてこばと学園での，この子たちとの例年どおりの実践に参加した私どもの仲間，杉本好行，安藤万里子が，それぞれタッちゃんと，またトミちゃんとかかわりつづけた体験をとおして，私なりに実感しようと試みる。以下それぞれのなまの記録は，こうした杉本が，また安藤が，あるいはかなしみのうちに，また絶望の中で，とまどいつつ模索しつづけた。実習期間中の日ごと日ごとの歩みである。

II

＜第1日＞

係長さんから，タッチャンの説明（特に，病棟内でもっとも知能が高いこと）を聞いた時，これは接触しやすいのではないか，と内心喜んだ。

ところが，プレイルームで，体をくねらせるようにして横たわっている彼を見つけた時，その喜びはある不安に変化した。というのも頭だけ大きく，手足はか細く，その異様な体つき。顔は大人びていてもちろんヒゲも生えている。動きのある甘え坊の子供ならともかく，このような大人とどのようにとりくんだらいいのだろうか。

初めは，このような不安をいだきつつ恐る恐る彼の横に座っていた私だった。二言三言，言葉をかけても反応があるのか，ないのか。するとすぐ，横にいた保母さんが，「タッチャンよかったね。あんたの話を聞いてくれるお兄さんが来たよ」この時，私の心は決まった。そうだ！徹底的にタッチャンの話を聞こうじゃないか。

タッチャンはドモリながら，不明確な発音で何かを訴えようとする。それは話をするというようなものではない。まさに，全身をふるわせながら何かを訴えようとする姿勢である。始めの30分は，時たま単語がわかるぐらいで，いったい何を言いたいのか全然理解できなかった。しかし30分も経過したころには，薄々とだがおおよそのことはわかるようになってきた。タッチャンは次のようなことを説明してくれた。病棟の歴史，中2病棟の再開，職員数，収容人数，自分がはいってきたときのこと――などなど。私は一語づつタッチャンの言葉を声を出して反復した。その内容が違うと，タッチャンは頭を横にふる，私の受け取りが正解になるまで彼はその言葉を繰り返す。

午後，タッチャンのそばへ行くと「わかった？」「わかった？」ときく。何のことだろう。午前中のタッチャンの説明のことであった。私は「わかったよ」「わかったよ」とニコッとする。タッチャンの説明は続く。私はメモ用紙に記録することを思いついた。

「県の総力をケッシュウ（結集）してここの学園をたててきた」

「昭和40年の4月の1日に工事をチャッコウ（着工）した」（着工ということばの意味がなかなかわからなくて焦った。）

「こばと学園の設計者は丹下けんぞう，あの世界的に有名な丹下けんぞう」――など。

係長さんの説明でタッチャンが参院選挙で投票したという話を思い出した。政治の話しが好きなのかな。そう考えて話題を変える。

「タッチャンねえ，政治の党でどこが一番好き？」

「社会党」

「なぜ社会党が好きなの？」

「あの政策――やっぱし防衛費を減らして社会福祉に全力を尽くすから好き――今の野党では政権がとれそうなのは，社会党が一番」

批判力が豊かなタッチャン。知的には普通に近いかもしれない。そんなタッチャンは何とか体を回転させて横に一人で移動する。しかし，1メートル移動するのに1分ぐらいはかかる。トイレも一人では行けない。オムツを必要とする。食事は口へもっていってやれば全部食べ

る。タッチャンはそういう自分，そういう周囲の子供達をよく知っている。

「第2の福祉の谷間の第2はここの職員とぼくたち」

「第1は？」と問いかける。

「寝たきりの老人」

新聞やテレビニュースのそのままの受け取り，吹きこみではあろうが，タッチャンって，暖かい心の持ち主だなあと思えてくる。

最後に彼が詩をつくってくれた。詩といっても，彼が言ったのを私が喜んで詩にしてしまったのだ。これは詩にしようよ！　私がそう叫んだ時，彼も喜んで顔をほころばせた。何回も何回も私が読み上げ，彼に確認をとった。彼は言う。「題は職員というのにしてくれ」

《職　員》

こんなせちがらい世の中で，こんな美しいものはない。

だって，自分の生んだ子供でさえも，平気で殺しちゃう。

こういう世の中で，物価高や，安い給料で，女性は，重労働，にもかかわらず

みんな，他人の子供達を育ててゆく

という事実は，何ものにもかえがたい美しい姿といえないでしょうか。

明日はもっとタッチャンの言葉を理解することに努めたい。言葉を通して彼の心の中へ，そして彼が表現する暖かい詩を知りたい。

＜第2日＞

朝7時，起きざま，すぐに「こばと」に入る。

中2病棟。

「こんにちは」と言って近寄ると，ドモリながら「こんにちは」とタッチャンは顔ほころばせる。どうやら私の顔をおぼえていてくれたらしい。午前中は主として他の子にかかわる。

昼食はタッチャンの大好きなスシ。「タッチャンよかったね，おいしい？」「おいしい。おいしい」横にいた保母さんが，「お兄さんが来てくれて，ゆっくり食べられるし，誰にもとられる心配ないね」タッチャンはニコッとする。午後，タッチャンとよく話をするというトシチャンに話しかけてみる。同様ききとりにくいが，タッチャンのことを話してくれる。「ぼくとはあまり性格が合わない。タッチャンは気が長いけれどぼくは気が短い。タッチャンの話は理解できない。むずかしくて。それにタッチャンは何回も同じことを言う」

同じレベルで，タッチャンの話し相手になってくれる人が，この病棟にはいないようである。

私がちょっといなかったすきに，私はタッチャンによって，来年の3月に中2へ指導員としてやってくる一大決心をしたということにされてしまったらしい。*　そんな事を言った覚えはない。ただちにタッチャンを追求。

＊〔かかわり手杉本が席をはずしていた間，彼とかわってタッチャンと相手をしていたのは他ならぬ筆者自身であった。そのときの状況は筆者自身の手によって以下のようにレポートされている。〕

あっちこっちの病棟をわたりあるきながら，私なりにせい一ぱいに子どもたち，　特に私たちの仲間ひとりひとりの担当した子どもたちと，状況の許すかぎりの接触を求めようとのみ模索しながら，子どもたちの間をめぐっていたぼく——

ちょうどそのとき，ぼくは中2のディルームにいた。みんながゴロゴロころがっている。

そこにタッチャンがいた。なかばギム的にぼくはタッチャンに話しかける。彼のことばの分りにくさに正直いってヘキエキしながら，いうなれば適当に聞いといて。ぼく自身又ほかの病棟へうつらねばならぬといった使命感を逃げ口実としながら，表面上はきわめて心からなるウチトケを自らよそおいつつ，なおタッチャンに話しかけているぼく。

タッチャンは話す。分らない，でも話す。ただ聞く，半分逃げ腰のまま。逃げ腰で分るはずがない。そうかといって逃げてしまえぬ私の動きのカタサがある。他の保母さん，若い私たちの仲間が私の動きをどうみているかの意識がないともいいきれない。

それにもかかわらずタッチャンは叫びつづける。「スギモトさん，来年4月，中2病棟にくるんだって。指導員として」ようやく聞きとれたコトバ「ホントかい，そんなこと杉本先生いってた？」ぼくはきく。杉本くんはそこにそのときいなかったのだ。

「う～ん」顔じゅう歪めて，外から見ればこれ以上の苦しみはないといった表情で彼はいう。「う～ん　ホンジツケツイした」

分らなかった。全然。そのことばが——自らのまずしさをこのときしみじみ思う。分らないんだ。タッチャンのあの必死の叫びが。

4たび5たび，ようやく聞いた。「杉本さん，本日決意した」と。

いあわせた看護婦さんたちも笑う。「タッチャンまた何？　うそいって」　タッチャンは一生けんめい心もち顔を赤くしながら，そうでない旨を表現する。ぼくも，また，それをうけとめながら，きわめて事実的なレベルでその可能性のないことを口にする。何という，まずしさ，何というこの子たちを知ることからの遠さ——とぼく自身かえりみざるを得ない。看護婦さんもいった。「ほんと——タッチャン　そういうのよ。もう主任さんをとおして申し送り事項にしてもらったんだって」こちらは現実水準のウケコタエしかない。県職の試験うけてなければダメなこと，もし合格してたとしても，コロニーかどうかきまらないこと，さらにまたたとえコロニーにきたとしても中2病棟の配属になるとはきまらないこと，などなど。

タッチャンは分ってるんだ——分っていながら微笑を絶やさない。「総長にたのんだってダメなんだよ」心ないぼ↗

追求してもニコニコして何も言わない彼。「ごめんなさいだね」と私。彼はゴメンナサイの「ゴ」の音をなかなか発音できない。私はどうしてもタッチャンに「ごめんなさい」を言わせたかった。しかし結局望みはかなえられず仲なおり。カルテをみると，現実と空想が入りまじることがあると書いてある。空想的なロマンティストは私を指導員にしたがっている？

今日は，心理学について，大変興味を持ったようだった。彼は言う「もっともっといろんなことを勉強したい」と。彼にはある目的がある。（目的――私が勝手につけたんだけど）

「北棟から中2へ移ってきた本当の目的は，ぼくが，自費の自叙伝を出版して，ひいては――一般の世の中の人達に理解をしてもらいたい――身体障害者といえども人間なんだという理解を――」

昨日よりは，多少ともタッチャンの内に入り込めたような気がする。実習あと3日，ずっとこれからもっと彼の苦しみを聞きいってみたい。5時半，帰り際，7時ぐらいまでつきあってくれというタッチャン。初めての私に対する甘え。

＜第3日＞

実習も3日目となった。体がだるい。中だるみのせいか。

7時少し過ぎ，病棟に入ると，タッチャンはTVの前で7時のニュースを見ていた。私が近寄ると，前日の爆破事件（東京・三菱重工爆破）のことをしきりに話そうとする。どうやら7時のニュースでこのことを報じたらしい。

私は，彼が新聞を読むことを思いだし，玄関まで取りに走った。玄関には特別の新聞受けが設けられてあり，彼の名前がはっきりと明記されている。なるほど，これは彼の自己主張の強さなのかもしれないな。私はそう思った。午前中は，彼とともに新聞を読むことに終始した。タッチャンは社会的な事件には敏感な反応を示す。カルテには，ニクソン大統領が就任した時に，当分，このことで看護婦や保母さんたちが悩まされそうだと，記されてある。今日，改めて，そのようなタッチャンの興味の旺盛さにおどろかされた。

昼食を食べた約30分後，突然タッチャンの嘔吐。私は多少気分が悪いのかな，と気軽に考え，自分の昼食に出かけた。1時過ぎ，ふたたび彼と会うと，どうも調子が良さそうではない。話しかけても，ウーウーと言うばかり。その後，2度目の嘔吐があり，タッチャンは個室へ送られる。しばらくのお別れ，と思って，他児の世話をやこうとしたが，個室へ移っても彼の嘔吐は続き，結局私もつきそってその部屋へ。個室では，あまり話しかけないほうがいいと思い，彼の顔をながめているうちに，ついウトウト。どれくらいの時間が経過したのか。タッチャンの再度の嘔吐に私は目をさます。彼の顔はマッサオ。額には汗。目に涙をためながら苦しそうに吐こうとする。その苦しみそのものは，質はちがうが，また原因もちがうが，酒飲みの私にはよくわかる。

今日一日，あまり進展はなかった。帰り際，「ゴメンナサイ」彼の言葉，多少他人行儀のところがある。アァあせらないことだ！

＜第4日＞

前日，何回も嘔吐があったので，朝，心配しながら病棟へ。タッチャンはやはり一人，個室にいた。前日の憂うつな顔はどこへやら，今朝はニコニコ顔している。前日，タッチャンを診察してくれた医師，岡田先生のことをさかんに話す。朝食はオジヤだけ，それと薬。一昨日のあれほどの食欲はもうない。

彼の嘔吐について考えてみる。ある看護婦さんは，一昨日の事，私が中2の指導員として3月にやってくる一大決心をしたという彼の空想，いや願望といってよい，それを圧えつけられたことによって，タッチャンは大分メンツをつぶされたのではないか，という意見だった。カルテをみると，なるほど，彼はそういった過敏さの故にしばしば嘔吐があると，記されてある。熱もないし，風邪ではなさそうだ。とすると，やはり何らかの精神的な要因を考えざるをえない。そうとすれば，一昨日の事はたしかに重要な要因に違いない。あの時，彼は決してウソを言うつもりなんて毛頭なかっただろう。彼は彼なりに空想を現実であってほしいと願っていたのじゃないだろうか。（このことについては，係長の一番最初のオリエンテーションの時に，彼の空想にまきこまれないようにとの注意は受けていたのだが）私が，そんな事を言った覚えがないと言えば，彼にとってみればコンワクしかないのは当然すぎるくらい当然であったのであろう。しかもそれが万座の中で云われたのだ。嘔吐の原因はともかくとしても，タッチャンが，このようにみんなの前で自分のメンツをつぶされたと思うのはきわめて自然な

↗くのことばに，彼はウナヅク。

何かしらシラジラしさ。

そこへ杉本くんが戻ってくる。ぼくは云う。「いつのまに君ここへ就職すること決意したんだ」と。杉本くんはまたまがおになって答える。「そんなこと云やしないよ，タッチャン！」タッチャンはどうそれをきいたんだろうか。うけとめたんだろうか。プライド高きタッチャンが，満座の中でウソいったように評価されたこのことを！

事であろうし，また同時に，あまりにも，人間的な感情であると思われる。彼は叫った，「身体障害者であっても人間である！」と。私もそう思う。彼のこうした叫びであるだけにまさしくそれは実感として私に迫ってくるものがある。

昼食後ふたたび嘔吐。しかしながら表情は非常に明るい。私もタッチャンと個室へこもる覚悟。私はもっともっとタッチャンと話したいのに，彼は数度の嘔吐のために体力が消耗したためか，眠ってばかり。私の方も，彼につられて，ついウトウト。フト，目をさまして彼の顔をみる。やすらかなその寝顔。

私は考える。人間としての本当の幸せを，求めながらも，彼は，おそらく，一生，誰かの手を借りながら生きていくであろう。生涯を，このコロニーで終えるのがよいのか，それとも，ここをとび出して，ちっとは社会の波にもまれた方がよいのか，少なくとも彼は彼なりの社会的志向性を明確にもっているのであり，その疑問は，私を悩ませる。彼の家族状況は決してよいものではないと聞いている。おそらく，彼の家族は，彼が家に戻ってくるのを望まないであろう。それではどうすればよいのか？人間，一個の人間としての自己実現は？

タッチャンの寝顔をみながら，障害児者の福祉とは何か――考えはとどまるところを知らない。

タッチャンと私の関係，かかわりのはじめに私なりに目ざした彼の苦しみへの私なりの接近は，彼の調子が悪いため，依然として進まず，非常に残念だ。体の調子が悪い時は，やはり，医者や，保母さんを頼りにしたがる。私は，ただ彼の横につきそうぐらいのことしかできない。何かしらひたぶるに淋しい。

＜第5日＞

最後の日，今日こそは，元気になってほしいと祈るような気持ちで「こばと」に入る。しかしながら，タッチャンは相変らず個室で，しかもさえない顔色。室内は何かしら胃液のような臭い。「おはよう」と言うと，「オ．ハ．ヨ．ウ」とニコニコする。「食事は？」と聞く。「イ．ラ．ナ．イ」　表情はそれほど堅くないけれどことばはニベもない。私は他の子供達の朝食の介助へ。

私たちの朝食をすませてまたすぐ入棟，タッチャンの個室へ真直ぐ。しばらくの間沈黙が続く。彼は壁を見つめたまま，何を考えているのか。それでもわきにいる私の存在が気になるのか，私の顔をチラッチラッと見る。私は私で，実習は今日で最後，彼との関係はいったい何だったのかと，考える。出来るならば彼の話をもっと聞きたかった。しかし，今は彼は病気。そして神経質なほど自分の病気を気にしてそのことで頭がいっぱいの彼。私は多少，焦り気味。だが一方，これでいいのかもしれないという気持もないではない。何も特別に構える必要なんてないじゃないか。あるがままの自然な両者の体験が一番重要なのではないか。「タッチャン！　新聞持ってこようか」彼の顔が笑顔で崩れる。

新聞をひろげながら「爆破事件はどうなったんだろうねえ」　私は声を出して読み始める。時々私の感想を付け加え，タッチャンの相づちを求めながら。一通り読み終った時，「タ．イ．フ．ウ」と彼。「タ．マ．ガ．ワ．キ．ケ．ン……」何のことだろう。もう一度新聞をめくってみると，なるほど，今日の社会面の見出しのトップは台風の影響による「多摩川危険……」だった。いつ読み取ったのかはわからないが，彼の読解力に感心しながら，「タ．イ．フ．ウ」の記事を読む。

10時から，プレイルームでみんなとのお別れ会。この場にタッチャンがいないのは何とも淋しい。元気な子供達とお別れをした後，私たちはみんなベッドの子供達のところへ。一人一人に別れのアイサツ。そしてタッチャンの個室へ。彼からは，全身からしぼり出すようにしての「シャ．カ．イ．フ．ク．シ．ニ．ガ．ン．バ．ッ．テ．ク．ダ．サ．イ」と，励ましのことば。私たちと握手。私はプレイルームにあるタッチャンのノートへ書きこむ。「とても楽しかった。――早く元気になって下さい――」　いつかまた誰かが，タッチャンが，読んでくれることを期待し，その時のタッチャンの顔がほころぶのを思い浮かべながら，「こばと」にサヨナラ告げた私だった。

（杉本好行）

Ⅲ

＜第1日＞

今回の実習にあたって，私には，漠然としたものではあったが，二つの不安があった。一つは，彼女が，重度の「肢体不自由」であるということ。この4月から加わった障害児のための日曜学校の子どもと接する時でも，肢体不自由の子には，何だか奇怪（？）な感じがして，近よりがたかった私だから――しかしその不安は，あっという間に消えてしまった。むしろ，それを感じるより前に北棟に入っていた。と言うべきかも知れない。いざという逃げ場のない状況になると，妙に自分の不安を昇華してしまっているという私自身の悪い癖によるのかも知れないが――ともかく，北棟の中に入ると，そこは肢体の不自由な子どもが床にころがっていることが，ごく「自然」な世界だったのである。（それは，それとして，「あたりまえの事」として，終わらせてしまっては

いけないものがあるようにも思うのだが）そして，そこに彼女はいたのである。第一の不安は，もうなかった。彼女の手が曲って動かなくても，寝たきりであろうとも——

2つめの不安というのは，彼女が成人であるということ。

「こんにちは！○○ちゃん，よろしく，おねえさんねえ——」といった調子で，にぎやかに接するには，彼女はあまりにおとなである。カルテによれば，彼女は，知能程度は7才。しかしそんな低いとはとても思えない。以前，「同じ，7才の知能程度ではあっても，生活年令20才の人と7才の人では，違うんだ」ということを聞いたことがある。まさに，そのとおりだと思った。もちろん知能テストは，6年前に実施されたものだから，その後の変化も当然考えられるけど——

「こんにちは！」「こんにちは」「はじめまして，よろしくね」「どこの学校ですか？」私は答える。「保母さんになるんですか？」また答える。「生まれたのは，どこですか？」またまた答える。今度は私から聞く番。「あなたは？」「名古屋の南区です」「本よもうか？本きらい？」「そんなこともありません」などなど。会話は，このように続くのだ。彼女の，はっきりとした，“デスマス”調の言葉に，内心うろたえてしまっている私。これまでの障害者への私のかかわりは，幼児，あるいは自閉症児ということで，働きかけが，どうしてもこちらからの一方通行気味にとどまっていたみたい。ところが，彼女と私は，初体面の二人の，おとなとおとなのまさに対等な交渉だったのである。

彼女は，私をごく普通に，「北棟への客人」として，受け入れてくれたように思われる。

彼女は，終始，落ち着いていた。そして，北棟の一日について，保母さんや，看護婦さんの勤務がたいへんだということなどなど，いろいろと話してくれた。まさに彼女は北棟の住人であり，そして私は客人であった。彼女は，寝たままで，他の北棟の人を見守っていた。私なんか足元にも及ばない位，細かな心配りをしながら——そんな彼女は落ち着いていて，堂々として立派だった。

私は，思ってもみなかった壁にぶつかってしまった。彼女のように安定した一人の人間と，ふれあうって——特に問題があるような子なら，いろいろ考えることもできるだろうに——5日間で，いったい，どれだけ彼女が心を開いてくれるのだろうか——否，むしろ，どれだけ私が，心を開いていけるのだろうか——普通の生活の中でも，私，こういうのって苦手だなあ——

彼女と夕方，わかれる時も，「バイバイ」とは言えない。「さようなら」とおとなびたアイサツしかかわせない私であった。

＜第2日＞

睡眠不足で，ボーッとした頭をかかえての，入棟であった。スッキリせぬままに，彼女の横に座っていた。しばらくして，彼女が，保母さんの一人を呼んで，「廊下につれていって」とたのんだのだ。トイレである。私に直接言ってくれなかったのが，ちょっぴり淋しかったけど，まだ2日目の朝だし，仕方もないなあ。昨日は，彼女のトイレにめぐりあわなかったので，これが初めて。廊下にうつぶせにコロガッタ彼女は，1センチ—いやそれよりも，もっと少ないかも——づつ，進んで行くのである。鼻の頭や，おでこは，汗びっしょり。ただでさえ曲がった背骨を必死でまげたり，のばしたりしながらハァハァ——言いながら。見ている私が悲しい（？）むしろつらいと言った方がいいのだろうが，涙が出てきて困ってしまった。途中で，「申し送りの方に出て下さい」と催促されて，行ってしまったので，結局，そのおりも，彼女のトイレの世話はしなかったのである。申し送りがすんで部屋へ帰ると，彼女のおじいさんが見えていて，彼女の世話をしてみえた。昨日ぶつかった壁のこともあって，今日は，ほとんど，彼女にはついていなかったのである。

それでは，一日私は何をしていたのか？パジャマとの着かえ，オムツのとりかえ，他の子の食事の介助など，もっぱら雑用に終始していた感じである。その中で，自分自身が，北棟に慣れてきて，のびのびしてくるのを感じていた。北棟のお客様ではないんだ，そんな実感が生まれて来たのである。だから，部屋でも，いろいろの子どもたちと接触できたし，放り出されて，うつろな目をしている子が，こちらが働きかけることで，たしかに生き生きするのは，すばらしく感動的であったし，それだけにほうり出されているかに思われる現状に対してはやはり問題を感じないわけにはいかなかった。

私と彼女との間は，このことによって，少しうちとけたような気がする。私が，北棟に，少しでもおちついた様子を見て，彼女も感じるところがあったのだろうか？夕方に何の話だか忘れたけど，ちらっとしたとき，例の“デスマス”調の敬語でなく，アッと思うほど，うちとけたしゃべり方をしてくれたのである。こっちが心を開かなきゃ，自分の地をださなきゃ，彼女だってうちとけてくれるわけがない。これ当然。

もう一つ，うれしかった事は，私が，彼女に本を読んであげていたとき，実習仲間の一人が，うしろから，大きなボールをもって，私に近づいてきたらしい。「あ，危ない！」って教えてくれたこと。なんだか，とっても

うれしくなっちゃった。なにか，明るいものが見えて来た感じだ。私が，どう自分を出して，北棟のなかで活躍するのか，これが，大きなポイントのようである。

しかし，私と彼女との間には，まだまだ大きなギャップがある。ともかく彼女が，私に頼み事をしてくれた時こそ，彼女が私に心を開いてくれる芽生えと考えてもいいかも知れないなあ。今はともあれ，まず，そこまで行きつくことが大切だ。

彼女は，明日，はじめて脳波をとるそうである。きっと不安でたまらないのだろうなあ——本を読んでいるときも，ふっと，そのことを言っていた。その時は，いいかげんに，聞き流してしまったけど，今，思うに，彼女の頭の中は，脳波のことで一杯だったようだった。もっと，一生懸命に聞くべきだった，と後悔してしまう。

5時半になって，みんなに「さよなら」言って，出ていくとき，最後にチラッとふりかえったら，彼女が目で追っていてくれて，「パチッ」と目が会って，思わず，うれしくってニコッと笑ってしまった。これだけ，たったこれだけで，今日の一日は，すっかり明るくなったのである。

＜第3日＞

今日は，予定どおり，彼女は脳波をとりに病院に出かけた。脳波は初めてなのでやはり心配そうであったが，さすが，トミちゃん，必死で，顔に出すまいとしていたようである。私も一しょについていった。まず，検査のため，注射をした。なにか意識をもうろうとさせるらしい，寝ている彼女のそばにずっと私もいた。ちっとは私もウトウトしたらしい。（おかげで，睡眠不足は少し解消した） 検査がおわっても，まだ彼女は，ねていたのである。

そのまま，彼女がすんなり目をあけて，もとにもどってくれていたら，事は簡単だったのだが——

2時ごろ，突如として彼女は，「オトウチャン——オトウチャンにだっこしてほしい——」と訴え始めた。話によれば，彼女は最近ずっと不安な様子がつづいていたとか——今まで，そんなこと，「オトウチャン」のオの字も口にしなかった彼女だったのに——しかし，彼女が訴えても，彼女の父親は来るはずがなかった——あんなに，冷静であったかのような彼女なのに，あんな注射一本で——というより，心の底に，あんな不安があったのか「オトウチャンにだっこしてほしい」という彼女と，あの“デスマス”調の彼女（ずっといっしょにいてくれたのね？ ありがとう今日はすみませんでした。と言うあの彼女）とが，私の心に二重になって重くおおいかぶさってきた。なんだかわからなくなっちゃった——

不安そうに時々かおをゆがめて眠っている彼女の手をしっかりとにぎりしめながら，今一つの手で漫然とカルテをくっていた私。ある頁を見開いてアッとショックをうけてしまう。そこには，彼女の詩があった。「世の中いやになった，すべてがいやになった——」というような内容であったと思う。* カルテには，彼女が，青年期の悩みをもっていることも記されていた。

彼女も20才だし，あたりまえだ。本当に一人の人間としての彼女の重みがズンと伝わる一日だった。そんなに単純に彼女を理解なんてできないなあ……そう思いながら，彼女を一人の人として認めていたつもりの自分であったのに，本当は，ちっとも彼女のことをわかってなかったんだなあと改めて気付かされたのである。

この一日は，ほとんど彼女のそばにすわっていることで暮れたようだ。しかし，彼女の心の奥にあるものを，とんだハプニングから見せてもらえて，私にとっては，有意義であったように思う。私と彼女とのかかわりというのは，どうなったか，進んだのか，否か，それは，明日，彼女がはっきりしてからでないとわからない。でも一日，ずっとつきっきりでいた。しかし，底知れない不安の中にある彼女であったから，なんらかの意味はあったのではないか，と思われる。（思いたい——これが本音）

明日の一日は，彼女が，悩んでいることの一部でも，話してくれるようになったらなあ——これも私のひとりよがりの願いにすぎないんだけど。

---

* すべてがイヤになった
この世の人生が　ますますイヤになってきた
長いことコロニーにいるとつらい時がたくさんあるし
私にとってはイヤな気分
いったいどうしたらいいの
自分で解決するべきか
それともお姉さんに云って
相談にのってほしい
この頃，朝おきてもすっきりしないし
なんにも　したくない時もあるし
こんなことでいいのでしょうか
人々達は　わからずに
頑張って動いてねって云うけど
時々は一人ぼっちで考えたい時がほしい
みんな私のことを期待しているかんじで
私にとっては　とてもつらい一日
こんなことって云わなくてもみんなあるのかな
毎日オトイレまで行くのが精一杯で
なにもかも忘れちゃって
遠くへ行きたいかんじ

私にとっての彼女は，割りあてられた一人のこばとの子どもであった。今は――と問われると――やっぱり今でもよくわからない。彼女の家のこと，悩みなどなど。私には，なんともしようのない程，重苦しい，つらくって，今日もまた，個室でカルテを見ながら，泣けてきて仕方なかった。単なる同情とか，そんなもんじゃあなかったと心の中で思いつつ。

＜第4日＞

朝，まだ，すっきりしてないという彼女だったが，となりで今一人の子に，ある保母さんが，「おねえさんたちに，今，どういうことしてほしい？」など，きいていたのがキッカケで，彼女のコロニーへの不満，毎日の生活で思うことを話してくれた。集団で生活することが，彼女のやりたい事や，気もちとズレていて，おもしろくない，何か，してほしいな，と思っても，保母さんたちの忙しそうな様子を見ていると何も言えない。保母さんも，よくわからないことが多く，「保育，何やりたい？」って聞くけど，いろいろみんなのこと考えると，困っちゃって「わからないワ，保母さんにまかせる」と答えてしまう。私だけじゃなく，みんなが楽しいようにするには，どうしたらいいのかわからない。などなど。

トミちゃんは語る。私は，ただ，聞くだけの役割。そして，あまり，みんながすっかりうまくいくように，考えても，一人では，いい考えがうかばないだろうから，トミちゃんのしてほしいことあったら，時々は，はっきり言った方が，保母さんにもよくわかっていいよ，位のことしか言えなかったのである。

今日は，日曜で，何も行事的なこともやらず，食事とオムツ交換だけ，それからあとになってシーツかえ，こうして割にひまだったせいか，いつもより保母さんが部屋にいて，彼女の話をきいたりしていたようであった。その間，私は，むしろもっぱらほかの子，ヒロミちゃんやマー子ちゃんと接していることが多かった。（ヒロミちゃんは，一人でいるとゴロッとしてるだけなのに，そばに行くと，手をとってみたり，わらったり，甘えて，かおを近づけたりするので，なにか，一人で放っておくことが気になるのである。マー子ちゃんは，積極的な子で，むこうから，名ざしで話したいと言い，私のことをモモエちゃんなんて言ってくれて，いっしよに歌うたったりしてた……）

夕食のあと，彼女とまた話した。そのとき突然，ポッッと，「明日，帰っちゃうの？」「そうよ」「せっかく友だちになれたのに淋しくなっちゃうな」「そうねぇ」「あのね，てがみ書きたいんだけど…」「うん，私もかくわ，明日，住所かいてくるわね」そのあと，彼女の生いたちめいたことを，とうとうと，時間まで，話してくれたのである。すなおに，喜ぶべきかも知れない。しかし―― 彼女が，今日は，私に「外に出して」とか「座りたいの…」とか，いろいろ，自分から要求したり，話したりしてくれた。たしかに，昨日のハプニングのおかげがあるみたい。彼女の気もちも変わったし，私の彼女を見る目の方も変ったのであろう。ところが，彼女が，これだけ，うちとけてくれると，今度は，私の方がためらってしまう。彼女の方が，私によりかかってくる度合と比べて，私の方は？　私にとって，彼女の存在って。

私は，彼女を理解したい，という気持で一杯である。それが，どの辺から生じたものであるか，ふとまた考えてしまう。何といったって，結局，部外者的に見ているのではないだろうか？

「友だち」という彼女からの声を聞いたとき，私は，よろこび，とか，うれしさとかいうものを感じる前に，とまどっていたように思う。彼女の，他のみんなのことも考える冷静さ，昨日，写真をうつしてもらっていたとき，よろこんでポーズをとっていた，あの意外な子どもっぽさ，シャワーのあと，化粧水をつけてもらってうれしそうだった乙女らしさ，何かしら交錯しちゃって，わかんなくなっちゃうなあ――

今日までは，なんだか夢中であったのだが，思うに少し余裕が出てきたとたんに，彼女から見ると，私って，どんな風なんだろう？　私は一生けん命，彼女のこと聞いたりしていたけど，わかりたいとか，理解したいとかいう気もちで？　いやそれとも単に「ふりあてられたから」だったのかも――　友達になりたいという気持は，私のなかにあったのか，なかったのか？　少なくとも私が，自由に友人を選ぶとするなら，彼女のように，人のことまで，気をまわして，一人で考え込んでしまったりするタイプの人は選ばないんじゃないかしら。ああいう気のつかい方をする人は，えらいとは思うけど。こんなこと考えるのは，私が，あまりに，彼女を同じ次元で見すぎているからで，もっと，ちがった考え方があるのかも知れないともまた思う。

＜第5日＞

今朝も，彼女は，御気嫌である。昨日，今日と，本当に楽しそうである。他の実習生のおにいさんに冗談も言う。「オハヨウ！」こういう返事が“デスマス”抜きでかえってきた。昨朝までは，「オハヨウゴザイマス」だったのに。申し送りの後で部屋に戻ると，彼女はウンチをしたがっているという。5日目にして，はじめて，彼女のトイレにつきあうことになる。私が一人でしまつした。彼女も緊張もしないで，「スミマセン」ではなく，

「アリガトウ」と言ってくれた。私は，もう，彼女の客人ではないのだなあ，そんな実感が静かに私を包む。それでも，私は，ちっとも楽しくない。彼女と，まるっきり他人であったら，よっぽどいい，なまじ，知り合い，彼女が少し心を開いて，私に寄りかかってきたばっかりに，あの重苦しさを味わわなくてはならない。彼女に近づけば，近づくほど苦しい。

彼女の，悩みぬいた心が，私と話すことで，少しでも軽くなってくれれば，それでいいじゃないか。現に，偶然の一致かも知れないけれど，昨日今日と，私に話してくれた後の彼女は，明るく生き生きしている。でも，でも。彼女はあの部屋から一人で出てくることもできなければ，一人で食べることもできない。彼女はある程度の知能を保っているがゆえに，それを自覚しているだろうし，悩みも深いだろう。そして，頭を働かせながら，ああやって，一日，また一日と生きていくのだろう。そして年とって――ああ，逃げ出してしまいたい。

この実習中，私が，トミちゃんの次に，よく接したのが，ヒロミである。ヒロミちゃんは，わかるのか，わからないのか，よくわからない。それでも，あやすと，よく笑い，はしゃぐ。ロンパリの彼女の目のどちらか一方に私の顔が映る。私も，うれしくなって笑ってしまう。無条件に，私はヒロミが好きだ。帰りの車中，ヒロミの顔がアップになって，私をニヤリとさせる。いつの間にか，自分もヒロミの表情になっている自分に気付く。かわいいヒロミ。ヒロミは苦労がなくっていいなあ――

マー子は，私のことを，モモエちゃん，モモエちゃんと言って気に入ってくれた。帰るとき遠くから呼んで，住所を教えてくれという。また来てね。今度は本，よんでね。と悲しそうに言う。明るい，人なつっこい子だ。マー子はトミちゃんと一つしか違わない19才である。だのに，なぜ，マーコの方は，こんなに無邪気に甘えられるのだろうか。環境のちがいか――　マー子を見ると，トミちゃんの暗さが気になってしまう。

昨日は，彼女と私の相性のせいにしていた，あの重苦しさは，本当はこんなところにあったのかも知れない。

私と彼女とは，たしかに他の子どもと私との関係とは違う。何かなまあたたかいものがあるように思える。ふり切ろうとしてもふり切れないもの。今日の私はほとんど，他の子と居たにもかかわらず，物理的距離を置いた私と彼女との間は，なまあたたかい，モヤッとしたものでつながっていた。なまあたたかく，しかも何か重苦しいものである。

別れの時，彼女は，そんなに悲しそうでなかったように見えた。彼女にとって私は，チラッと訪れてはまた帰る，数多くの実習生の一人であったろう。しかし，私には，抱いた時のあの重さと同じように，ズッシリと心に沈み込んでくる彼女だった。私には，「別れ」が感じられなかったといってよい。別れることができたら――とさえ思うのに。　（安藤万里子）

Ⅳ

5日間，かくして暮れた。重いこころを抱いて実習を終え，半月たった今ふたたび，タッチャンと，またトミちゃんとかわした「ことば」を，さらにその「かかわり」を，かみしめふりかえる杉本と安藤。

5日間を思いおこして杉本は，次のようにタッチャンとのかかわりを総括する。

実習第1日目における，タッチャンとの“出会い”は，私にとっては，この種の障害者と出会うのは初めてでもあり，どのようにつき合ったらいいのか，不安と緊張の瞬間であった。あらかじめ，カルテ，オリエンテーション等の情報は与えられていたものの，どのように想像をめぐらせてみても，そこから一個の人間の姿を描き出すことは出来なかった。

およそ，一個の生きている人間を目の前にしては，彼に関する情報は死語に近い，と私は思う。決して，カルテ等が誤った情報を伝えているわけではない。しかし，それらの情報は疾病論的なものが多く，没個性的であり，断片的であって，一個の人間そのものの生の全体を伝えるにはほど遠い。タッチャンとの“出会い”において，私が感じた不安と緊張は，前もっていかなる情報があろうとも，いやむしろそれ以前の生きている“人”と“人”との出会いの出発点であるような気がする。情報とは何の関係もなく，プレイルームでタッチャンの生のなまなましさを，まのあたりにした時の印象は（その手足，その頭，その表情，そのしゃべり方），今でも忘れられない。

このように第1日目の私は，一人の人間と“出会った”という喜びで，多少興奮気味だった。しかも，この第1日目の帰り際に，彼が自からのコトバで語った詩は，何か新しいものを発見したようなそんな気持ちで私を有頂点にさせた。もちろんこのような感情は，私の一方的なものではなく，タッチャンの喜びも，その表情や見振りから，じかに私に伝わってきた。彼にしてみれば，こんなにも自分にだけかかわって話を聞いてくれる人は，今のところまず他にないだろうし，あるいは，「これは詩にしようよ」とさそいかけた上で，彼の自己主張を受け取め，これをあるひとつの形に構成してくれる人間は他にいないと感じたのかもしれない。私たちは，それがたとえ限られた範囲のものであれ，ここではたしかに，ひとつのことをともにしてるという喜びをもつことができた。しかしながら，このような急速な関係の深まりが，一方では，ある落とし穴を用意していたとは――

3日目の昼食後，タッチャンの嘔吐があった。この原因と思われるものに関してはすでに体験レポートにも述べた通りである。やはり，タッチャンの内における私の存在は，彼の孤独さ故に，空想的，願望的な存在にまで発展したのであろ

うと思う。彼にとっての私とは，自分の願望や欲望を満たしてくれる，いわば彼のものなのである。この空想（その願望のあまりの強さ故にタッチャンにとっては現実のものなのだ）が，現実と交錯する時，彼は一種の困惑状態に陥らざるをえない。彼は失恋にも似た気持ちを体験する。衝撃は大きい。たとえ彼が習慣でもって食物を口の中へ入れたとしても，もはや胃袋の方はそれをうけつけない。もちろん，彼の非常に敏感な感受性のあり方もこれに一役買っている。1回目の嘔吐は，彼には，2回目，3回目の嘔吐を引き起こす原因ともなる。嘔吐はなかなかおさまらない。かくして彼は個室へ。以後私も個室につき合うことになる。

「ことば」をとおして，重い障害をもつ子との，何かこころとこころとのつながり，交流の道が，この子とかかわる杉本の前に開かれようとした。ともに詩を構成することによって，その可能性の芽生えを実感するのである。この子とかかわることの喜びに心もうきたたんばかり，この子の人間としての生きざまに何らかの力になりうるのではないかと，自己の位置づけの意味を期待しはじめた杉本が，第3日目，はげしいタッチャンの嘔吐に直面する。何の嘔吐なのだろうか，このタッチャンの嘔吐は――原因として思いあたることがないわけでないだけに，このピリピリとはりつめた，タッチャンの鋭敏な感受性に胸うたれ，「ことば」なく，ただ個室で嘔吐に苦しむタッチャンの傍に横たわっているよりほか，なすすべを知らない杉本なのである。

同じく安藤もまた，はげしい情動的不安にふりまわされつつ，トミちゃんとの5日間を次のように回想する。

言うまでもなくあの5日間の体験は，私自身にとっては，日常の生活の何倍も，何十倍もに値するものであった。「私自身にとって」に終始し，ともすれば，他の視点を見失いがちであった程。

重度の肢体不自由のひとたちとのかかわりは，私にとって生まれて初めてのことであった。彼女たちは，見学のとき，つまり，外から見ていた時は，何の意志も，感情もなく，ただ床の上にコロがっている奇妙な物体にすぎなかった。1日目，トミちゃんと接して，彼女の「……です」「……します」という，はっきりした言葉に驚いた私。それは「こんな人」が，こんなにきちんと考えしゃべれるわけがない，という私の先入観の表われでもあった。2日，3日とたつうちに，この棟にいる人たちみんな，一人一人がはっきりとした個性をもった人間なんだということ，それが無条件に感覚的に納得できるようになった。彼女たちも，生きている人間だ。こんなあたりまえの事が，初めて，素直に受け入れられた。それが，また無性にうれしい事でもあった。

一緒に居て，私は確かに彼女たちの生きるエネルギーを感じていた。すばらしく思った。「彼女たちが生きることの意味は？」なんて見学のとき以来の問は，実際に，こうして彼女らの前にかかわり手として立つとき，もはや愚問としか思えなかった。

しかし――とやはり考える。彼女らは幸せか？　社会から切り離されて，こばとの北棟の中で，毎日食べさせてもらって，オムツをとりかえてもらって，夜が来たら寝て――もっと別の生活があってもいい。じゃあどうすればいいのき？　問い返えされても私には何とも言えない。ヒロミのくったくのない笑顔が目に浮かぶ，答のない問ばかりを山のようにかかえ込んでしまうことになる。

トミちゃんと，5日間，接しなくてはならない。1対1でより深くより親密に――それは私にとって苦痛であった。彼女の担当になっていなければ，私はヒロミやマー子や他の人にかかわっていこうとしただろう。彼女が立派な成人であり，一個の人間としての深みを持っていたこと。これは先に述べたように私には予想外のことであった。もっと別に，私自身の人間としての器の小ささを自覚しなくてはならなかったことも大きな理由であったろう。

人と接するときは，一方通行ではだめだ。日頃からそう信じていたし，実習の途中でもそれを感じていた。第1，2日目では彼女にうちとけてもらおうと必死で働きかけていた私なのに，彼女が心の深みを見せはじめたとたん，すくんでしまったのである。せっかく彼女が，心を開いて話してくれ始めた時には逃げ腰を決め込んでいたのである。そして第3日目，あの脳波のあとの彼女のおそらくハダカの“ことば”，あの昏迷の中での彼女の変容――衝撃だった。彼女の心の中に入りこみ，私の心を開きぶつかっていくだけのゆとりが，もはや私にはなかった。　5日間おわればまた，もとどおり私とは他人の彼女。その彼女に全身でぶつかるだけの器が私にはとてもなかった。

人とのかかわりを求めるときは，自分のすべてを出しきれる，そういった覚悟なしにはできないはず。私の心の奥で彼女との本当のかかわりを否定していた何かがあったのか。それとも，日常の生活の中で，人とかかわっているつもりで実はかかわっておらず，流されていたにすぎない事実が，コロニーでこうした形であらわれたのか――そのどちらでもあるような気がする。

実習が終わった今もコロニーのことが頭に浮かぶ。トミちゃんが，カネ子さんが私にむかって大きく，必死で口を開けて訴えかけている。ヒロミが笑ってる。セッちゃんがじっと見ている――それが私を何とも言えない気分にする。頭でスッキリ分析してしまえない。また，そうしたくない。もやもやと浮んではまたはてしなく沈んでいく体験の思い出である。

“デスマス”調の礼節正しい応接に，始めにえがいていた障害児のイメージとのくいちがいにたじろぎつつ，どう接していいのか，なまじ「ことば」あるだけに――その「ことば」がしかも私たちの通常の会話の中で，親しいもの同志心をうちあっていけるときの，あの自然なめらかな「ことば」とちがって，他人行儀でヨソユキの，ああした正しい応接であることが，何よりもかかわ

り手としての安藤をと感わせる。つきあいが苦痛になる。あの礼儀正しい格調ある「ことば」のかげに何があるのか。どうしてよりハダカで接することができないのか。安藤自身の問題か，トミちゃんの側の問題か。そう問いかけて答えもなくただ立ちすくんでしまう安藤である。

仕方なしに安藤自身は，むしろそれから逃避的といってもよい，ほかの子たちとのかかわりを求める。この子たちとの取り組みの中に，実習にいま自分が参加していることの意味を賦与して，逃避の罪の意識から逃れようとする。

そして3日目，脳波検査のあと，トミちゃんにずっと半日つきそってた安藤は，彼女の昏迷状態の中で発するハダカの「ことば」の意味に激しい衝撃をうける。「オトウチャン　だっこして！」　たましいの奥底からひびくかとも思われるこの絶叫，つつましやかな，よそおった，「デスマス」調ではない，トミちゃんのこうした昏迷の中での真実の叫びを一体安藤はどううけとめてよいのだろうか。ふたたびただ困惑の中にどうにも動けず，昏迷のまま個室に横たわるトミちゃんの傍で，もう立ちすくむしかない安藤なのである。一体何の昏迷なのだろうか，トミちゃんのこの昏迷は——

このとき私たちは改めて，ほんとうにどれほどタッちゃんを，またトミちゃんを，知り得ることができていたのか，できていなかったのか，そのきびしい問いかけの前にさらされることになる。不自由ではありながら，「ことば」をとおしてかなりのコミュニケーションが期待できる，それだけに知的な発達においては，さほどの遅れを示しているとはみられない，この二人なのである。同年代の青年とくらべてそれほど劣ることなく，いやそれ以上に，政治に社会問題に，深い関心を寄せるタッちゃんであり，人一倍，彼女をとりまく周囲の人たちとの人間関係に，微妙なニュアンスをもって配慮するトミちゃんである。

そうしたタッちゃんが，トミちゃんが，それぞれ，自分にとってきわめて日常的な状況とは異なる，ある特殊な事態に直面して，そこで突然の心因発作ともみなしうる身体症状を併発し，「ことば」を失い，あるいはそれこそ本音かともまがうたましいの“叫び”をもらすのである。嘔吐，そして昏迷発作はそれらの重積の中で明確にこの二人のミセカケの自我，ヨソユキの仮面を無情にもひきはがしてしまう。苦悩し，不安におののく，はだかの人間実存がなまなましくここにこうして露呈されてくる。

それらの反応がヒステリー性のものであるとか，心因性のものであるとか詮索することの意味はここではむなしい。Binswanger，L.も，ヒステリー性精神病は個人の生活史から心理学的に了解され，心因性反応は有機体の心情的・身体的機能障害から生物学的に説明される，と区別しながら，たとえこのように機能と生活史的契機という概念が橋をかけることの出来ないものだとしても，これら両概念が抽象的に関連してくるのは，そのつど単に同じひとりの現実の人間においてであり，しかじかに機能する有機体をもち，またしかじかに経過する生活史を生きる，ひとりの人間にほかならないからであるとの視点に立って，いずれにしろ人間的有機体のない生活史も，生活史のない人間的有機体もないと強調する。

生命機能と内的生活史との関連の上から，タッちゃんの，またトミちゃんのこの種の症状について，さらなる考察をすすめるに足る知見も情報も，この段階ではきわめて乏しいし，またその視点からの分析は，現段階で本稿の意図するところでもない。

この子たちがあるとき，突如としてこうした人間実存のなまのすがたを浮き彫りに露呈するとき，これらとかかわるかかわり手としての，杉本にとって，また安藤にとって，これらの体験が，障害児者たちの人間存在としての本質を省察していく上に，いかばかり，意味あるものとなり得たか，またなり得なかったかをあとづけること，私どもの教育研究実習での主たる目途はここにあったといってもよい。

それ故にこそ，ここでもまた，この二人の体験のなまの記録の提出にとどめたのである。

「ことば」あることはある意味でかなしいとはじめにうたった。それこそいわゆる「ことば」あるが故に，この子たちとの取り組みをすすめるにあたって，ひとつの既成の構えにともすればとらわれがちであった杉本と安藤が，この種の衝撃に出会って，人間存在の重味に圧倒され，障害児とのこうしたなまのかかわりをとおして，この不可知なるもの，人間そのものへの，暖かい配慮にみちた，しかもきわめて新鮮なまなざしを向けていく，変革への，それが一つの契機とでもなるならば，タッちゃん，トミちゃんの，その生命機能あるいは，内的生活史をとおしての人間存在への接近も，こうした延長線に立って改めて詳細に分析され，その人間学的意味を明るみの座にもたらされてくることをも十分期待しうるのである。

（昭和50年4月15日）

昨年また，8月のおわりから9月のはじめにかけて，「心身障害児の療育」と標榜して18名の仲間とともに，愛知県心身障害者コロニーでの教育研究実習を行った。

5年つづいて，はるひ台学園重度棟には，その内6名の仲間が，そして今年始めての実習の場として重症心身障害児施設こばと学園の北棟，中棟に，残りの12名がそれぞれ入りこんで，例年どおり4泊5日の療育に取り組んだのである。

研究実習での目的は，今年もまた同様に，療育者ひとりびとりが，たゞ療育の場の中ではだかで体験することの意味を，自らに問いかけることに主眼がおかれたが，特に今年この重症，重複障害のこばと学園が実習の場として選定されるには，心身障害という面から，より極限の状況を生きる，ひとりびとりの障害者とかかわって，その生きることの意味をどれだけ省察できるかの試みがこめられていたといってよい。

すべての仲間が，またそれなりのうけとめの様式でこの実習を体験した。それなりにひとりびとりがこの実習での体験の意義を実感したことも事実である。すべての仲間の，体験の記録がその意味ではきわめて尊い。

本稿でとりあげたのは，それらのうちたまたま，「ことば」ある子，そしてその「ことば」あるが故に独特の体験を得たとみられる学部学生杉本好行，安藤万里子，二人のなまの体験記録である。重度の障害をにないながら，それこそひたぶるに生きぬく実存の重味を，夜ごとの討議をとおして，私たちなりにまた共感しあったが故にほかならない。

稿を終えるにあたって，毎年のことながら，コロニー関係者各位のいつにかわらぬ暖かい御配慮を忘れることはできない。いわゆる通常の療育実習とはかなりその様相をことにする，私どもの体験実習は，こうした当局の寛容あふれる御厚意が得られなかったなら，到底ゆるされるものではないであろう。心からなる謝意を表するとともに，この療育の場に生きるすべての障害児者たちの，より豊かな生きざまと幸せとを心から希求するものである。

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY PHYSICALLY AND MENTALLY RETARDED (the 6th report)

——Through the Verbal Contact with the Severely Physically Handicapped——

Eiji MURAKAMI

Last year, we visited the Kobato Hospital in the Aichi Prefectural Colony, as we had visited annually, and had extremely valuable experiences to contact with the severely physically handicapped who had not so suffered from intellectual disorder.

We were able to have a chance to talk with a few cases among them, but needless to say, their verbal expression was not so fluent to put their thought into words owing to their speech difficulty. Nevertheless, their strong desire to learn several social problems or their sensitivity to worry about some interpersonal affairs produced a profound impression on our hearts.

When some of us unexpectedly experienced to encounter some accidents which differed from their daily lives, we were especially touched by the dignity and the worth of the human life which showed for the severely physically handicapped how to live in face of such a difficult situation.

In this paper there are only two reports which show the experiences of some of us which they got through the intensive contact with the severely physically handicapped by the means of verbal communication in our customary seminar in the Aichi Prefectural Colony. But, this is the very our attempt to clarify the worth of life for the severely physically and mentally handicapped from the standpoint of a humanistic approach